

## “菊薫る物価調査の時となり”

文化の秋、行楽の秋、物価上昇の秋でもある。生産者米価の値上で、このところ諸物価が一斉に上昇する気配をみせ私達の台所に大きな脅威を与えようとしている。このような状況下において、11月に全国物価統計調査が行なわれる。この調査は全国770市町村を選び、7,000人の調査員が約20万の店舗について国民生活に関係の深い約370品目、850銘柄について調査を行なうもので、この調査によつて得られた資料を物価政策に活用しようというものである。

## “まだ先に楽しみがある生命表”

生命表とは、国民の寿命に関して生存数、死亡数、生存率、死亡率および平均余命等を年令別および男女別に表現したものである。この生命表のうち平均余命とは、ある年令における生存者が、全部死亡するまでに、各人が生存した年数を合計しこれを当初の生存数で割つた年数、すなわちある年令の者が、その後生存しうべき平均年数をいう。厚生省人口問題研究所で最近調べた生命表による0才の者の平均余命は、男68.09才、女73.30才で戦前まで人生僅か50年と言われた時代にくらべると、人間も長命になつたものである。

## “兼業化増える農家のくらし向”

最近、社会、経済の動向につれて農業に関するいろいろな話題が提供されている。これら農業に関する基礎的な資料を得るために毎年実施している農業基本調査が2月1日行なわれ、その結果が発表された。この調査から農業事業者（経営耕地10アール以上の農家、および経営耕地10アール未満でも、農産物の販売額が年間3万以上）をみると、農家の兼業化が目立っている。兼業農家は129,100戸で全農家数の65%を占め、これを10年前の昭和33年の兼業農家78,295にくらべると50,805戸（全農家に占める割合は33%）で32%も増加していることがわかる。

## “出稼に故郷の空が夕焼ける”

農業基本調査で調べた農家の出稼者は、11,581人あつて、そのうち県内へ4,471人、県外へは7,110人出ており県内出稼ぎの1.7倍でそのうちの63%が東京都である。また年令別にみると30才～39才の30才台が3,381人で29.2%を占めつぎに、40才台が2,856人で24.7%、20才台2,794人24.1%と青壮年層が圧倒的に多くなつている。

## “野良仕事若いもんには負けない気”

三チャン農業などと呼ばれるけど、農業専従者の年令別構成をみると、たしかに現在の農業労働力は女子と中高年令層が多いことが農業基本調査の結果に表われている。すなわち女子労働力の占める割合は239,345人で男より85,910人（53%）も多い、また男の39才以下の働きざかりは全体の34.9%に過ぎず、40才以上が65.1%と圧倒的に多く、このうち60才以上の老人が24.9%もいることは、本県の農業労働力が、女子と老年労働力に依存していることを物語っているものである。

## “機械化をして農家にも嫁がくる”

農家の兼業化とともに、若い人達から農家は嫌われる傾向が強いようで、農家で深刻な問題は嫁とり後継者の問題、そこで労働不足をカバーして機械化の普及が年々高まっている。現在のままでは若い人達に魅力は薄いようで機械によつて少しでも楽に作業を進め、収入を多くしなければならぬだろう。その表われとして基本調査による農用機械はいづれも前年より増加し、今後も増加の傾向にあることがわかる。

## “干害の畑に水稻が稔り”

今年は、干害により畑作は不作、農家にとって最も割の良い米作りが盛んだ、42年に新しく陸田とした農家は4,382戸で、面積は、1,282ヘクタールとなつている。



②

夕陽に映える柿を仰いで感動した陶工柿右エ門に象徴されるように10月はまさに果実の最盛期であり、また野山も美しい。古く芭蕉の句にも「里古りて柿の木持たぬ家もなし」というのがあるが戦後庭の片隅に植えた柿の木にも真赤な実がたわわである。幾たびかの台風の来襲も幸い本土をそれて遠く東方洋上に消滅し去ったが、意外と多かつた今年の天災の被害を想いおこすのである。悲惨な交通事故の数々、集中豪雨の暴走、東水西照とでも云うのか東北地方の大洪水が報ぜられるかと思へば、日照りで泣く九州の農民がある。1967秋の世相の変容はあまりにもめまぐるし。というもののお目出たの目立つたのも事実であり、とくに9.10月の休日の婚礼の数多きこと、水戸市内のある式場では1日に数百万円の売上げをみたとかみないとか、思へば今年は丁未（ヒノトヒツジ）、大凶の丙午（ヒノウエウマ）が明けた反動とみるべきか。ある本に「丁未の災は丙午よりも惨なり、昭々たる天象、運行に見まはれ、人力の能く為す所に非ざるなり。」とあり、必ずしも丙午が明けたとはいえ油断のならぬ年であるらしい。またこのことは統計的にも立証される。

すなはち、古くは天曆1年（947年）の天然痘の大流行、続いて天明7年丁未のいわゆる天明の大飢饉、これは大阪市内に流動し、その地の豪商が難民により襲撃をうけ、その騒動は江戸市中はまで波及したのである。次いで弘化4年丁未（1847年）信州善光寺一帯の大地震、明治に至つて40年の株価の大暴落、足尾、別子両銅山の鉱夫の暴動、関東地方の大洪水、遠く台湾では「生蕃人」の日本人大惨殺事件等々丁未に起つた限りない被害はまこと人力ではどうしようもない。

しかしながら、こうした天象の異変よりも最近には12支に関係なく思いがけない大災害が私たちの身边に待伏せている。いわずとしれた自動車事故がそれである。金星4号が軟着陸し、金星地上に柿の木のないことを証明し、南北両極のないことも明らかにされた。遠く宵の明星として、ビーナスの愛称をもつ美しく眺められたあの星も、みにくい裸身をあらわにした感じがしないでもない。こおした時代にあとを断たない多くの災害に可弱い人間共は地球のすみでしか息できないのが、己が創つた怪獣に自分が喰われるテレビ映画を今日も子供達が熱心に見ている。

## 昭和42年度地方統計

### 職員業務研修会開催

10月3日6日までの4日間にわたり、今年度の地方統計職員業務研修会が開催されました。この研修会は、市町村統計関係職員の方々に統計事務に必要な知識と技術を習得していただくとともに、地方統計機構の機能を強化充実させることを目的にしております。

今回の研修は、今年度第1回目の研修で、下館市市民会館において開催され、30数名の統計職員の方々が終始熱心に聴講されました。

なお、今年第2回目の研修会は11月27日から30日まで茨城県統計館において開催されます。

なお講習科目は次のとおりです。  
第1日目

統計計算の基礎知識  
内容審査の要点

県統計課統計主事

中 村 卓 雄

第2日目

調査員の適正とその指導

県統計課消費統計係長

森 島 忠 蔵

標本調査のしくみ

県統計課統計主事

星 宏

第3日目

産業分類の適用

商品分類の適用

職業分類の適用

県統計課商工統計係主幹

大 原 賢 二

第4日目

地域開発と統計

県統計課課長補佐

大 録 義 行

日常生活と統計

県統計課企画調整係長

田 中 文 司